



©Succession Miró

絵画

ジョアン・ミロ(1893-1983)
1936年 メソナイト(板)に油彩、カゼイン、タール、砂ほか
88 0×118 0cm
長崎県所蔵

ミロは、ピカソやダリと並び称されるスペイン出身の20世紀を代表する画家である。生地カタルーニャ地方の自然と民族芸術、そしてフォーヴィスムや1920年代のシュルレアリスム(超現実主義)の詩人たちの影響を受けた独特の作品を多数残している。

本作品は、網目状の凹凸を持つ板の上に、光沢のあるタールや砂など質感のある素材を絵の具として用い、詩的な浮遊感のある形態や線が描かれている。20世紀初頭の様々な前衛的芸術運動と強いつながりを見せながらも、カタルーニャ地方の乾燥した大地、照りつける太陽、夜の高い星空、そして同地の古代の人々の信仰の世界に私たちが誘われる作品である。

フォーヴィスム(fauvisme) / 20世紀初頭の色彩に焦点をあてたフランスの絵画運動。
アンリ・マティスらが知られている。

平成17年度に新美術館と新歴史文化博物館が開館します。このギャラリーでは、そこに展示されることとなる貴重な作品や歴史史料を紹介しています。



ふるさと長崎

宮城まり子 文
Text by Miyagi Mariko

プロフィール みやぎまり子
東京都出身。1955年、「ガード下の靴みがき」で歌手としてデビューし、舞台やテレビで活躍。1968年、日本最初の肢体不自由児養護施設「ねむの木学園」を設立。子どもたちによるコンサートや美術展を開催するなど、精力的な活動を展開し、東京都文化賞など数多くの賞を受賞。作家 吉行淳之介と恋愛、37年間同棲。彼亡きあと、ねむの木村に吉行淳之介文学館など建設。福祉と文化の共生をはかる。



作家吉行淳之介は、病気と闘いながら小説を書いた。1960年、「鳥獣虫魚」を書き上げた後、「長崎へ行ってみようか」と言った。共に暮らし初めての二人きりの旅行。うれしくて、オランダ坂、グラバー邸、二十六聖人、平和祈念像の前の階段に座り話した。

父と住んだ佐世保の短い日の中に、8月9日の原子爆弾の落ちた日が入っていた。貨物列車で逃げてこられる被爆者の方々に、父が、「水をくんできなさい」と私に命じた。恐くてふるえながら夢中で自分の両手で水を口に入れて、さしあげたことを話した。「僕のね」旧制静岡高校の同級のしかも同室の2人の有能な友人が、兵役をまぬがれるため長崎医大に代わり、三菱重工に行った。淳之介さんは、そのまま東大の文学部に行った。そしてお友達が9日、一瞬で亡くなったこと、「悔しいね」と言いながら、「自分が今、平和の中で生きていることが不思議だ」としみじみ言った。

長崎の空は、あくまで碧く深くあり。美しい街、長崎。哀しい街、長崎。強い街、長崎。私はエキゾチックなこの街の歴史の中に、自分をずっとおきたい。あの海、あの島々、あの夕日、私を引っばってやまない。



想い出の石だたみ(長崎市 オランダ坂)

カント哲学研究の大家

朝永三十郎は、明治四年(一八七一年)、大村藩士朝永甚次郎の三男として彼杵郡川棚村石木(現在の川棚町)に生まれた。第一高等中学校に入学した年に父を失くしたが、兄弟は互いに助け合って、順次弟の学資を出して進学させた。東京帝国大学で哲学を専攻し、卒業後、京都の真宗大学で哲学を専攻し、卒業後、京都帝国大学助教授を経て、明治四十一年(一九〇九年)ヨーロッパに留学。帰国後は、京都帝国大学教授に就任した。わが国における西洋哲学史研究の先駆者として活躍、特にカント哲学の史的考察に優れた成果を残した。大学の講義では、カントの平和論を熱心に講じたという。また、代表的な著作「近世に於ける我の自覚史」は、若者たちに哲学への道を拓く不朽の名著である。幼少より身体が弱く、自分は名前どおり三十歳まで生きられるかと案じたというが、人生のほとんどを西洋哲学史の研究に捧げ、八十歳でこの世を去った。ノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎の父としても知られている。

長崎偉人館
第15回

朝永三十郎

【西洋哲学者】
(1871年~1951年)

